

野田地区遺跡出土の犁からすき

平成18年（2006年）に実施された高速道路の4車線化工事に伴う野田地区遺跡の発掘調査で、平安時代の「犁」と呼ばれる木製品が発見されました。遺跡から犁が発見されることは全国的にも大変珍しく、貴重なものです。

犁とは、牛馬にひかせて田畑を耕すのに用いられた農具です。農耕具の機械化が進行する昭和30年代以前においては一般的な道具として使用され、町内でも農家で飼われた牛が犁をひく風景がよく見られました。掲載した古写真は、大正9年（1920年）頃の金屋地区の風景です。

犁は「唐鋤からすき」とも書くように、人力用の従来の鋤に対して、新型の伝来した鋤という意味で用いられ、「大化の改新」が行われた



7世紀中頃（650年頃）に農業技術を改革するために中国大陸から日本に本格的に導入されたことが近年の研究によって明らかになってきました。その後およそ1300年もの間、形を大きく変えることなく使用され続け、日本の稲作には欠かせない道具として定着していきました。

全国各地における遺跡

の発掘調査から発見された犁は、これまで20点余りと少ないことから、日本に伝来した後はそれほど広く普及することはない。特に古代においては限られた階層が使用する特別な道具であつた可能性が考えられます。野田地区遺跡でも完全な形の土器が近くで伏せられた状態で発見されていることから、祭祀さいしに用いられた可能性があります。

野田地区遺跡出土の犁を初めとして県内各地の遺跡から発見された農耕具と、民俗資料から紀州の農具の歴史を振り返る企画展が紀伊風土記の丘で開催中です。ぜひご覧ください。



野田地区遺跡出土の犁
(メジャーの黄色部分が1mを示します)

紀伊風土記の丘 夏期企画展
「すき・すき・からすき たんぼにお水がはいるまで」

9月1日（日）まで開催

広告 町収入の一部とするため有料広告を掲載しています。